

シヨートストリー  
「答えはベンチの座り方にあつた。」

山村光春

絵・つき山いくよ

やまむらみつはる  
1970年生まれ。BOOKLUCK主宰。  
ペーパーメディアの企画・編集・  
執筆に携わる。旅のさやかで  
美しい瞬間を写真と文章で切り  
取ったリトルプレス  
『Beautiful Moments』を自身の出  
版レーベルBOOKLUCK  
PUBLISHING roomよりリリース。  
[www.bookluck.jp](http://www.bookluck.jp)

つきやまいくよ  
絵やパフォーマンス、本の制作  
など、ジワジワ熱く活動する(氣  
がつけばわりと長い)。およそ週  
に1回、メールの新しいタイトル  
(ニュータイトル)を更新中。  
<http://ameblo.jp/tsukilemon/>

<イベントのお知らせ>  
山村光春さん、つき山いくよさ  
ん、Appleの発音さん達が主催す  
るイベント<アップルの発音。  
パンとスープとフリーマーケッ  
ト>が、'08年4月29日、pridel  
graphic labにて開催されます。

そくさとした足どりで僕がしゃにむにめざしているのは、  
家から15分ほど歩いた大きな公園の、噴水のある芝生の、右脇を抜けた林の、  
クネクネとした小道の、5クネめにばつねんとあるベンチだ。

そこは公園のいわゆるプレイゾーンからはほど遠く、家族連れはほぼ来ない。  
かといって、何かにちゃんとさえぎられているわけでもないので、  
こっそり愛を語りたいカップルもやっぱり来ない。  
そもそもそこはメインの道と道をつなぐ、  
ほんの少しショートカットができるだけの、どうってことのない小道で、  
たまに通る人こそいれど、とどまる意味は一向に見出せない。  
なのにそこにはなぜかベンチがあった。

僕がそのベンチのある公園を見つけたのは、ある週末。  
街へ買い物に行って家まで戻る途中のこと。  
最寄りの駅は普通列車しか止まらないのに、うっかり急行に乗ってしまい、  
ひとつ向こうの駅まで行った。ひと駅戻るのもおっくうなのでそこで降り、  
家まで歩いていたさなか、偶然見つけた。

そのベンチはあまりの唐突っぷりで、ふしぎな存在だった。  
そこに山があるから登るのだ、などという高尚な理由ではからきしなく、  
僕はただ座ってみた、何の気なしに。  
予想通り、そこから見えるものはおもしろくもなんともなく、  
心持ち無沙汰で、きょろきょろとあたりを見回したり、  
ベンチの背に腕を乗っけ、その上に頭を乗っけてみたり。  
そうこうしてもやはり落ち着く気配を見せないので、  
そろそろ帰ると踵を90度返し、  
背もたれに垂直に座ったその時、  
心臓がドキッとして、目がバチッとクギ付けになった。

一見ポツポツと、無造作に立っているように見える木が、  
その角度からだけ見ると延長線上にまっすぐ、ずっときれいにどこまでも、  
トントントントントントントンと並び続けていたのだ。  
僕はくうっと目を細め、奥の奥の奥まで!  
定規でひいたように美しく連なる木々のようすにしばらくみとめた。

僕はベンチから見るこの風景が、やけに気に入ってしまった。  
何かを調べるためにググッたら、思いがけず別の、  
でも超サイコーなサイトが検索にひっかかったのに近い、  
めっけもんでもうけもんな感じのうれしさだった。

季節はもうすぐ春になろうという頃だった。  
はだかんぼうだった木々が少しづつ芽吹き、  
やがて葉っぱがつくまでのプロセスを、  
同じベンチに座り、同じ角度から見ることができた。  
葉っぱがあっちにぱつり、こっちにぱつりとずれてつきながらも、  
最終的には分からなくなるくらいわさわさと、  
世にも目にも心にも素晴らしい色をして変化していく。  
それは僕にとって、紛れもなくアンビリーバボーン体験だった。

大げさに言えば、一気に100人の半生をつぶさに目の当たりにしたような  
「見届けた感」があった。

川のほとりでときどき会う女ともだちに、  
公園のベンチのことを言おうと、何度もベロの奥まで出かかった。  
けれど言い出しかねていた。  
自分だけのひみつにしたい、というキモチは確かにあったけれど、  
彼女ならいいと思っていたし、  
だからべつだんもったいぶってるわけでもなかった。  
ただそれを誰かに言うことで、ベンチとあのまっすぐ連なる木々ごと  
消えてなくなってしまうんじゃないかという、なぜか恐さがあったのだ。

ある日。僕がいつものように散歩がてら公園のベンチに行くと、  
なんと!先客がいた。  
白い口ひげをたっぷりたくわえた紳士然としたおじいちゃんで、  
いままでそんなことは一度たりともなかったものだから、僕はうろたえた。  
しかもそのおじいちゃんは、明らかに「あの角度」から眺めている。

遠目からおそるおそる見ていると、おじいちゃんは僕に気付き、  
まるで屈託のない表情で、口をすばめながらニッコリと笑った。  
それは、もうずいぶんと前から僕のことを知っているかのような  
まあよい、親しみをこめた笑顔だった。  
僕はふらふらと、いざなわれるよう近づいていった。

「な、兄ちゃん。なかなかおもろいやろ」  
おじいちゃんは言った。そのひとことで僕はすべてを悟った。  
それから同じベンチに腰掛け、ゆっくりと長い長い話を聞いた。  
おじいちゃんは僕の大方の予想通り、40年前この公園を設計した人だった。  
もともとここは、大きな沼のある雑木林で、  
そこに公園を作るにあたり、広葉樹を新たにたくさん植えたこと。  
ただ、植えるだけじゃおもしろくない。  
なにかひとつ、誰も分からぬ隠れた“仕掛け”を作りたくて、  
ある角度から見ると、木がまっすぐになるように植え、  
そしてそのヒントとなるよう、あえてここにベンチを置いたこと。  
周りからはなぜこんなところに?と猛烈に反対されたけれど、  
頑として聞かず、さりとて理由も言わず、思いを突き通したこと。  
そして、そんなことさえすっかり忘れていたある日、  
偶然通りかかった時に、ここに僕が座っているのを見つけて、  
当時と、当時の自分のことがわあっと一気に思い出されたこと。  
「今はもう、何の役にも立たんヨボヨボのじじいやけどな、  
ちっとは残せたことあったんやなって思たら、うれしいでなあ」。  
僕は胸が詰まってしまい、何も気の利いたことを言い返せなかった。

次の日。僕は女ともだちと会って、その一部始終を話した。  
ふだんは話すのが苦手な僕だけど、  
その時ばかりはここぞとばかりに、言葉はいくらでも口について出た。  
彼女は、うれしそうに、ほんとうにうれしそうな表情で耳を傾け、  
最後に「グッジョブ!」とおどけた顔で親指を立てた。

それから僕らの待ち合わせ場所は、そのベンチになった。